

---

# なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

コンフェクト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

### 【Nコード】

N9670U

### 【作者名】

コンフェクト

### 【あらすじ】

僕の好きなゲームの大好きなキャラが目の前に実現化しました。これは一体、どういうことでしょう。これは神のお導きですか？ いや……普段の行いが良い、僕の努力の賜物ですね！ ……ごめんなさい、調子扱きました。でも、ハイテンションになるのも仕方ないじゃない。この状況、最高に嬉しいんだから！

## 出会いは突然に

きつと、人生の中で一度は思うだろう。ああ、こんな子が現実にいたらいいのに……と。

それは例えばTVの中で活躍するような有名女優だったり、アニメのキャラだったり。

僕の場合はその対象がゲームのキャラクターだ。

「ええつと……ここどこ？」

もし、自分の目の前に、『さっきまでプレイしていたRPGのキャラが三次元化』されていたら……あなたはどうします？ どうしますよ？

そう、僕の目の前には女の子がいた。

四畳半のそれなりに汚い部屋の真ん中にぽつんと、お尻と両手を下につけたポーズで。

白磁を思い起こさせるきめ細やかな肌と、徹底的に美と可愛さと萌えを追究させたようなスツとした顔立ち。その顔についた大きな蒼い目をぱちくりさせている。

銀色と水色の中間を表現したような流麗なロングヘア！。黒い布服の上に羽織る形で純白のローブに身を包んだその姿はまさにファンタジーのキャラそのものだ。

「あ」

辺りを見回した彼女は部屋の中で佇んでいた僕と目が合う。

僕はというと、震えていた。

それは恐れから来る物ではなく、ましてや体調不良などから来る震えでもなく。

ただ純粹に、僕は感動していたのだ。感動に打ち震えていたのだ。

「く、く、くくく」

「く？」

自然と口から漏れ出ていた僕の声拾うように、目の美少女が口を開く。

「く、クレアたあああん！」

「う、うわあっ！？ きゃあああっ！？」

僕は目の前の美少女に飛びついて抱き付いた！

そしてそのまま腰に手を回し、彼女の顔に自分の顔を近づけ、強引に唇を

が、彼女の右手から繰り出された高速の右ストレートが僕の顔を捉え、そのまま意識はどこかに飛んだ。

## 彼女は暴力的

どうやら僕は気絶していたらしい。顔の表面が焼けたようにヒリヒリする。

目を開けた僕に最初に飛び込んできた映像は見目麗しい美少女だった。

心配した顔で僕を見つめている。

ああ、よく見るとクレアたんじゃないかあ。僕の好きなゲーム、『レイド・オン・サタン』に出てくる美少女武闘家。

ということは、これは夢か。まさか夢にクレアたんが出て来られるとは。今まで何度見ようと思ってても出て来てくれなかったのに、初めての経験だ。

よし、このまま夢の中で彼女とくんずほぐれっ

「あ、起きた？」

風鈴が鳴るように美しい声が響いた。

やけにリアルだ。まるで本当に目の前にクレアたんが居るように

「つて、本当に居るし！」

僕は歓喜の声を上げて体を起こした。そうだ、さっき突然僕の部屋に現れて、僕は殴られて。

……ということは、これは現実じゃないか！ 目の前にいるのは本物のクレアたん！ マジですか！？

「あの、とにかく状況を説明しなさいよね。ここはどこなのよ。そしてあなたは誰？」

クレアさんは困り顔で溜息を吐き、僕に問いかけた。

僕は興奮冷めやらずまま、自分が高校生男子であること、ここが日本であること、クレアさんがゲームのキャラであることを簡素に語った。

彼女は終始困惑の表情である。よくわからないことが多いのだろう、当たり前か。僕も興奮と困惑が入り交じって訳のわからない状態だ。

「牧場泰三>>マキバタイゾウ<<……タイゾーね」  
「つつつ！」

クレアさんが僕の名前を読み上げた。すごい、名前を呼ばれているよ、僕。クレアさんに名前を呼ばれているよ。

僕の顔はきつと赤くなっていることだろう。浅名詩織ボイス（クレアさんの声優さん）だよ！？ その透き通るような繊細な声で今、僕自身の名前が呼ばれている！ これだけでご飯十杯はいける！

「な、なんでそんな恍惚の表情を……。あ、あたしも自己紹介しないとね。あたしの名前は――」

「クレア・リフィール、十七歳。身長百六十三センチの体重は四十八キログラム。スリムな体型だけど出るところは出てる僕好みの体型！好きな食べ物はプロフィールだけで聞くと太った人間であるという印象を抱かれやすいピザ！特にチーズとトマトをふんだんに使った物が好み！血液型はAB型で、特技は硬貨を指で曲げること。スリーサイズは上から八十二、ごじゅうきゅ」

刹那、饒舌にクレアさんのプロフィールを語っていた僕の輪郭間際を凄まじい風圧が駆け抜けた。その原因は彼女の空を切る拳によるもの。

ていうか僕の判断があと一步遅かったらまともに食らっていた。

「あ、あつぶな！ また気絶したらどうするの！」

「その方があたしにとって最良の結果だと思うわよ！」

クレアさんのつり上がった瞳が僕を真っ直ぐに睨み付けている。高校二年生にしては童顔だと言われる僕の顔が潰れてしまうじゃないか。

クレアさんに殴られるのは嬉しくもあるけど、もう少しだけ手加減してもらいたい。

「っていうか、あんたって危険人物でしょ！ 紛れもなく！ さっきもいきなりあたしに抱き付いてきたし！」

「失礼な！ 僕は至って安全だよ！ 三度の飯よりクレアさんが好きなだけの存在だよ！」

「あんたの中での安全の基準が知りたいわよ！」

彼女は徹底的に僕に敵意の目を向けていた。隙あらば殴られそうだ。

仕方ない、いきなりこうして僕の前に現れたのだから、戸惑いでいっぱいだろう。僕自身もこの状況には心底びっくりなのだから。

と、とりあえず、彼女に現状を理解してもらわないと。

がんばればく

「つまり、あたしはこれの中に出てくる登場人物ってことね」

クレアさんはゲームの入っていた箱を見つめながら呟く。

このゲームはパソコンゲームである。ジャンルはRPG。

戦士、武闘家、魔法使い等の職業の中から一つを選び、その職種  
の人間が広大な世界を旅して魔王を倒すという単純明快なゲームだ。  
ちなみに仲間はおらず、ずっと最初から最後までキャラクターは  
一人で戦い抜かないといけない。

「うん。ほら、箱にも描かれてるし、説明書にも載ってるでしょ？」

「本当だ……」

クレアさんは納得出来なさそうな顔で眉を潜めている。自分が異  
世界にやってきたという現実を直視出来ないみたいだ。

二次元から三次元。にわかには信じがたい転移である。

「はあ、なんでこんなことになったのか……わけがわからないわ」

クレアさんは右手で頭を抑えて嘆く。

凛々しい姿も良いけど、悩みに悩むクレアさんの表情もたまらな  
くいいなあ。

「いや、でも理由にはちょっとだけ心当たりがあるよ」

「へえ？ 聞かせなさいよ」

僕はドヤ顔で告げることにした。



「毎日毎日、片時も忘れずに『クレアさんと恋人同士になれますように』って願ってたからだと思うよ！」

「そんなのが理由になるかあっ！」

クレアさんの右腕が、今までにない最高レベルの勢いで僕の顔めがけて飛来した。

今の威力は恐らく、作中に登場するモンスターであつてもノックアウトするレベルだ。

先ほどの経験が無ければ、たぶんまともに食らっていた。

「く、クレアさん、照れ隠しだからって、その攻撃は僕が死んじやうよ」

「どれだけポジティブなのよあんたは！ 照れ隠しじゃないし！ 微塵もその気無いから！」

「えっ……嘘でしょ……？」

「なんでこの世の終わりみたいな顔してんのよ！」

僕は思案する。もしかして……クレアさんはあまり友好的じゃないのか？

『好き好き大好き、タイゾーくん』て感じじゃあ……、ないのか？ ないのか？

ていうかもとよりクレアさんは人に好意をストレートに表現するタイプではない。どちらかというとツンデレ系だ。

だから普段は暴力的な感じが続くんだろう。言葉にもトゲが多い。僕に危険が振りまかれることは多い。

「だがそれがいい！」

「……」

ニヤリと微笑む僕。

見るとクレアたんは汚物を見るような眼差しを向けていた。顔も呆れている様子だ。

「く、クレアたん？ 怒っちゃった？」

「通り越したわよ。はあ、もういいわ。……てか、その『たん』ってのは何なのよ。呼び捨てでいいわよ」

クレアたんから呼称の許可を頂いた。呼び捨てでいいらしい。  
……呼び捨て……だと……？

「クククレレレ、レ、レ」

クレアたんを呼び捨てで呼ぼうと頑張る僕。  
声は震え、肩は竦み、全身が悲鳴を上げる。  
頑張れ、頑張れ、あと、もうちょっ

「うわあああ！ 恥ずかしくて言えないよ！」  
「なんで!？」

クレアたんが白目で驚く。僕はあまりの恥ずかしさに悶えていた。  
クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて……思いっきり意識してしま  
う。

そんなこと、僕には耐えられない。恐れ多すぎて、嬉しすぎてっ！

「そ、その、やっぱり『クレアたん』のままがいいよ！ クレアた  
んを呼び捨てで呼ぶなんて、脳みそがとろけそうだよっ！」

「あんたプロフィール語ってたとき呼び捨てだったわよねえ!？」

僕は沸騰する脳内をなんとか抑えようと必死で転げ回る。クレア

たんは転げ回る僕を見て『エライところにきてしまった』と言いたげな顔をしていたが今はどうでも良かった。  
クレアたんがやってきたのだ。これで僕の一生の幸せは確保されたようなもの

「お兄ちゃ

」

そのとき僕の部屋のドアが開いた。  
そこには、僕の妹のミヨが立っていた。

## 妹、登場

僕の妹である牧場御代はドアを半開きにしながら固まっていた。理由は単純明快。彼女の視線は思いっきりクレアさんに釘付けだった。

「お、お兄ちゃんが……」

わなわなと体を震わせるミヨ。その顔は驚きを隠せていなかった。ミヨは中学三年生である。背丈は平均のそれより小さく、頭の高い位置に短いツインテール。灰色のスウェット上下に身を包んでいた。

「モテナさすぎるからって、ついにコスプレイヤーのデリルを呼んだぁー！」

「お、おい待て妹よ！」

叫びながら全力で走り去ろうとする妹を咄嗟に引き留め、その場に立ち止まらせる。

どうやら妹はむちゃくちゃ誤解している模様だった。

「お兄ちゃんがそんな不純なことをするわけがないだろう！」

「ゲームの女の子が好きな時点でもう不純だよ！」

よくわかっていらっしゃる妹だった。……………じゃなくて！

「別の発想は無いのか。もしかしたら、彼女、とかかもしれんだろ

う」

「そんなのお兄ちゃんに出来るわけ無いよ！」

「うつ……」

ミヨの言葉は大きな釘となり、僕の心臓に突き刺さった。く、悔しくなんかないもんねっ！

っていうかなんでデリ ルなんて単語を知っているのか謎だ。最近の若者は学習が早くて怖い。

「じゃあ、なんなの、あの人。お兄ちゃんの愛してるキャラみたいだったけど」

「それがな、聞いて驚くなよ、ミヨ。なんと本物のクレアたんがウチにやって来てくれたんだ！」

興奮して声が高鳴る僕。それを聞いたミヨの目の色がすうっと消えていく。

「……お兄ちゃん、そんなに生きることが辛かったんだね。受け止めようよ、現実を。確かに嫌なこともいっぱいあるかも知れないけれど、その分良いことだって、たくさん、あるよ。お兄ちゃんが何か悩んでるんだったら私が聞かし、出来ることだったら助けたり力になるよ？ だからあまり一人で悩んだり思い込んだりしないで、私に助けを求めてね、お兄ちゃん」

まるで鬱病患者を慰める際に見せるような顔をする妹だった。完全にイツちゃってる人扱いされていた。

そんなミヨに僕は事のあらましを語ることにした。ゲームを終えたら傍にクレアたんがいたこと。僕のテンションがマックスなこと。始めは信じていなかったミヨも、僕の力説に嘘はないと感じたの

か、どうにか状況を説明することが出来た。

「ゲームの中から、出て来ちゃったってこと……だよね？」

「うん、その通りだな」

「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

どうしよう。クレアさんが来てくれて舞い上がっていたものの、よく考えるとこの先、どうしよう。

大好きなクレアさんが来てくれた訳だけど、なんか問題も多い気がする。

この世に存在しない人がやってきた。言葉にすると簡単だけど事態は深刻な気がしないでもない。

まあ、僕は幸せだから無問題なんだけどね。

「ゲームの中に、送り返せないの？」

「そんな通販の返品のように言われてもなあ。……………どうやって

？」

「……………」

妹が腕を組んで悩んでいた。数刻考えた後、ハッと閃いたように顔を上げる。

「パソコンの画面に、ぶっこむ」

「随分と抽象的だな、おい」

「だってそれしか考えられないよ！」

むーとむくれる妹。まあ僕も案は出てないわけだけど。

そういえばクレアさんが出て来たのは画面の中からじゃないはずだ。僕はずっとモニターに直面していたし。

ゲームを終えて、気づいたらそこにいた、という感じだった。

「と、とにかく私も会ってみるよ、クレアさんに」  
「んじゃ、行こうか」

ここであーだこーだと話していても埒があかない。  
僕達はクレアさんの待っている、僕の部屋に戻るのだった。

## 妹、絡む

「じー……」

「じー……」

「……あの、あんなたち何やってるわけ？」

僕とミヨは扉の縁からそれぞれちょこんと顔を出し、クレアさんを舐めるように見つめていた。

「その子は？」

「あ、ええと。私、お兄ちゃんの妹で……牧場御代って言います。よろしくお願いします」

誰なのかと尋ねるクレアさん。それに対しミヨはいたく丁寧に切り返していた。

その礼儀正しい姿勢に感銘を受けたのか、クレアさんはニッコリと笑いながら応対する。

あれ、なんか僕の時と大分、対応に違いが見られるような気がするんだけど。

「なんでも、ゲームの世界からやってきたそうですね？」

「ええと……そうなるのかな。信じたくはないけれど……」

ミヨが質問をする。溜息を吐きながらも、クレアさんは現状を受け止めている模様だった。

クレアさんの話によると、冒険の最中に気づいたらここに来ていたらしい。

その最中というのが、僕が先ほどまでゲームをプレイしていた部



分と同じであつたため、どうやらゲームの中から抜け出てきたのは間違いないようである。

「やつぱり、僕の愛が起こした奇跡に違いないね!」

「ねえ、ミヨちゃん。あなたのお兄ちゃんていつもこうなの?」

「はい。クレアさんにぞつこんの、現実と妄想の区別がつかない変態野郎です」

高らかに喋る僕。なんだか妹とクレアたんから冷たい目線が飛んでいるような気がするけれども、気にしない。

「でも、お兄ちゃんがこうなっちゃったのにも訳があつて……。お兄ちゃんは昔、女の子に酷い振られ方したんです。その頃のお兄ちゃんはすごく病んで……。どうしたらいいんだろうと思っていた私は、誕生日にゲームソフトをプレゼントしたんですけど。そしたらそのゲームに出てくる一人の女の子　つまり、クレアさんに大はまりしちゃって。それからです、お兄ちゃんが現実の女の子を見なくなつたのは」

淡々と語る妹にクレアたんはなるほどと相槌を打っていた。

ああ、そういえばそんなこともあつたな。しかし僕は今、クレアたんというパラダイスを手に入れているから無問題だ。

「　ッ、そ、そうだ!　よく考えたらクレアさんが全部悪いんだ!　クレアさんなんてキャラがいるせいでお兄ちゃんは二次元の女の子を愛する体質に……。許さないよ!」

「え。ちょ、ちよつと待ちなさいよ!　それは逆恨みって奴でしょうよ!?　私に悪いところ何も無いじゃない!」

「クレアさんが魅力的なのが悪いんだよ!」

「あたしにどうしろつてのよ!?!」

「お、おいおい。二人ともその、落ち着いて……」

なんか二人が険悪なムードになっていた。さっきまですごい和やかな雰囲気だったのに。

「あんまりふざけたこと言っていると、女の子であろうと容赦しないわよ？」

クレアたんが物凄い形相で拳の骨をばきばきと鳴らしていた。

その様子にミヨは一瞬だけ身をこわばらせるも、ふっと得意な顔でクレアたんを見据えた。

「ふっふん、いいのかな？」

「な、何がよ」

「もし、ここで私が大声を出してみたりしたら、どうなるかな？  
人がすっ飛んでくるよ。そしてクレアさんはこの世の人間じゃない、謎の、未知の人間だよ？ そんな人がおっぴらに暴れたりしたら、どうなるかなあ。クレアさんはこの世界じゃ戸籍も何もないわけだから、保証も何も無いし、奇異の目に晒されるよ。そして拳げ句の果てには学会の研究所へ……ふふふ」  
「うっ、うっう……」

お、おお。なんか腕力では圧倒的に負けてるはずの我が妹が押し  
ているぞ。

「どうしろってのよ……。あたしには魔王を倒すっていう使命があるんだから、あなたたちには構ってられないの。早くゲームの中とやらに戻してよ」

「そっだよ、お兄ちゃん。早く送り返そうよ。お兄ちゃんの衛生上も良くないよ」

ミヨとクレアさんの意見が一致していた。どうやら、クレアさんを早急に戻さないといけないみたいである。舞い上がっていた僕の心は見事に打ち砕かれた。

いや、でもせつかく来てくれたのだし、ううむ。

「同居って形は……ダメ？」

『ダメ』

ミヨとクレアさんの声がシンクロした。僕の意見はまるで通りませんでした。

## 出たり入ったり

「なあ、ミヨ。馬鹿なことを聞かかも知れないけど……」

「うん、お兄ちゃん」

「クレアさんは、どこに行った？」

ゲームを起動した途端、クレアさんがどこかに消えた。

僕はクレアさんがどんなゲームから飛び出してきたのかを教えようと、パソコンの前に座って『レイド・オン・サタン』を起動し、セーブデータをロードした直後　　気づくと隣で見守っていたクレアさんが消えたのである。

僕とミヨは辺りをぐるぐると見回すが、どこにもクレアさんの姿は無く、ごく普通の僕の部屋であるだけだった。

「ゲームの中に戻っちゃったんじゃない？　それかもう夢だよ、私達は夢を見てたんだよ」

「いや、そんなわけあるはずないよ。だってこの顔の痛みがすごくリアルなんだ。さっきクレアさんに殴られたという事実が、本物である証拠だよ」

「悲しい現実の見据え方だね……」

僕にはしっかりとクレアさんにぶん殴られた記憶と痛みがある。転んで打った訳でもないし、電柱に顔をぶつけたとかいうオチでもない。

一体、クレアさんはどこに消えてしまったのか。僕とミヨは顔を見合わせる。

そして二人してパソコンの画面に目を吸い寄せる。

画面の中には3Dで表示されたクレアたんが居た。広大な野原に丘がぼつぼつと点在するフィールド。その中にクレアたんは立っている。

周りには少数のモンスターがうろついていた。主にスライムのような軟体性の敵や小型の鳥の敵。

要するにワールドマップという奴だ。

「それに、僕とミヨが同時に夢だか幻覚だかを見るって、ありえなくね？」

「まあそれはそうだね」

謎は深まるばかりだった。とりあえず僕とミヨは部屋の中を探索することにした。

押し入れのフスマを開けて中を覗いたりしてみるが、やっぱりクレアさんの姿はない。

「ゴミ箱の中にもいないよー、お兄ちゃん」

「お前探す気無いだろ!？」

妹のやる気がゼロだった。縦二十センチ程度のゴミ箱にクレアたんが入るものか。

僕は思案する。一体、彼女は何処へ。消えたのは、ゲームを始めてロードをした時辺り。現れたのは、ゲームを終えたとき。

そこから導き出される答えは

「まさか」

僕はもう一度パソコンの前に座り、ゲームのコントローラーを手を取った。

適当にその場でセーブをして保存し、ゲーム自体を終了させる。  
そして僕とミヨは部屋の中をぐるりと見渡す。

『あ』

僕とミヨは二人して間の抜けた声を上げていた。

見てみると部屋の真ん中にちよこんと、正座して座っているクレアさんがいた。

目をぱちぱち開閉しながら、きょとんと佇んでいる。現状に認識が追いついていない、という様子だった。

クレアさんが、クレアさんが、戻ってきた。

「く、クレアたあああん！」

「せいっ」

「オウフツ！」

クレアさんは真顔で正拳突きを繰り出し、僕のボディーへとめりこんだ。

飛びかかった僕はその場で膝を付き、お腹の激痛に身を悶えながらその場に沈み込んだ。

大変痛い。けれどもクレアさんが戻ってきたという事実の嬉しさの方が勝っていた。

「あ、あれ？ クレアさん、戻ってきたの？」

「……………そうみたい」

彼女曰く、元の世界（RPGの中）に戻って安心し、さあ冒険の続きをするぞというところで気づくとこっちに来ていたらしい。

やっぱりそうだった。要するにクレアさんはゲームをやめると、こっちに来る。ゲームを始めると、消える。

つまりゲームをプレイしている間は向こうで生きていることになる、ということなのだろう。

「要するに、あたしってタイゾーの掌の上……？」

「そういうことになるね」

クレアたんはその事実を知ると、頭を抱えて唸りだした。感動しているんだろう。これからは僕の意志でクレアたんを召還したり出来るわけで、いつでも会えるということ。

「僕は今最高に嬉しい気分だよ！」

「あたしは最高に泣きたい気分よ！」

僕の夢は広がりまくっていた。

「あ、クレアたんのセーブデータをいっぱい作ったら、ハーレム状態に出来ないかな……」

「ならないと思うよ、お兄ちゃん……」

## 家族の絆

「というわけで、こちらがゲームの中から飛び出してきちゃったクレアたん」

「あらまあ」

クレアたんを紹介することにした。

うちはお父さんが海外勤務のため家にはいない。そのため手始めにお母さんに紹介することとする。

ゲームのキャラだと聞いて少しかり面食らっていたお母さんだけれども、大して驚く素振りはなさそうである。

「えっと、クレアです。よろしくお願いします」

「はい。仲良くしてくださいね」

大きく微笑むお母さん。元々細い目がより一層細くなる。

天然パーマが掛かっているんじゃないかというふわふわとした長髪。

癒し系という表現が正しいゆるふわ系の母親である。

「お、お母さん？ 驚かないの？ 変だと思わないの？ お兄ちゃんのゲームから出て来たって、言ってるんだよ？」

ミヨは信じられないといった様子で語りかける。

異次元からのお客様が来たという事実にお母さんはまるで動じる姿勢を見せず。

「えっと……………それが、どうして驚くことになるのかしら？」



何が問題？　という感じで首をかしげるのだった。

「いいかしら、みーちゃん」

みーちゃんというのはお母さんがミヨを呼ぶ際の呼称だ。

お母さんは腰をかがめて目線の高さをミヨに合わせると、真面目な口調で言葉を発する。

「この世にはね、超常現象がありふれているのよ。有名な物だと神隠しっていうのがあってね。現世と別の世界があると仮定して、時空の歪みに人間が取り込まれたりする可能性が示唆されているの。科学が進歩したとはいえ、世界に広がる様々な謎は未だに解明出来ていないものなのよ。だから」

お母さんはより一層真面目な顔つきでミヨを見つめて言う。

「つまり、ゲームからいきなり人が飛び出しても　　まる

で不思議なことではないのよ」

「いや、思いつきり不思議だよ！」

ミヨは冷静な意見で反論していた。

そこで頭を縦に振るような人が悪徳商法に騙されるのだろうな、と僕は内心想った。

「それにしても泰三、羨ましいわね。まさかゲームのキャラクターがこっちに来るなんて……。お母さんもね、昔に流行っていた漫画のキャラクターが好きで好きで。出てこないかなって、何度も思ったものよ。」

お母さんは昔を懐かしむように語り出す。

頬に掌を当てて心なしか惚気ているように見える。

「そう、アンドウレ様が出てこなかったから……私はお父さんと仕方なく結婚しちゃったのよ」

仕方なく結婚すんなし。

クレアさんとミヨは「この親にしてこの子ありだー!」と言い  
たげな顔をしていた。

お母さんの好意でクレアさんに料理を振る舞うことになった。

僕がクレアさんはピザが好物だと言つと、「こつちの世界にもピザがあるんだ」とクレアさんは喜んでいた。

木造テーブルの四席に僕とクレアたんが向かい合い、僕の隣にミヨ。ミヨの対面にお母さんという布陣だ。

「前にピザ作り教室でちよつとだけ習ったことがあるんだけど、上手く出来ていなかったらごめんなさいね」

「いえ、すごく美味しいです!」

クレアたんは上機嫌でピザを口に運んでいた。嬉々としたクレアたんの顔がたまらなくかわいい。

とろりと溶けたチーズがたっぷりとパン生地に乗っており、アキュセントを加えるように刻まれたトマトがちりばめられている。

ゲームの世界から来た彼女だけど、こっちの世界でも食事は出来るようだ。

「そういえば、ミヨ」

「ん？ 何、お兄ちゃん」

「RPGの世界ってトイレとか見かけないけど、クレアたんてウコするのかな？」

「知らないよ！」

僕は真面目な疑問を隣にいたミヨにぶつけたのだけど、一蹴されてしまった。小声だったのでクレアたんとお母さんには聞かれていない。

それ以上そのことについて考えたら本気でセクハラ、変態だとミヨが言うので僕は渋々とその疑問を頭から遠ざけた。

「賑やかそうな家庭ですね」

「そうね、うちはお父さんが遠くに出ているけれど、大きな家庭問題も無いし、安泰ね。クレアちゃんの家族はどんな感じなのかしら？」

お母さんは何気ない質問をクレアたん to 投げる。

僕は一瞬、その質問は止した方がいいと感じたが、クレアたんが特に気負っている風でもなく語り始めた。

「両親は、他界しています。後は弟が居るんですけど、弟はその……姿を消してしまって、失踪中なんです」

「あ……」

少しだけ顔に陰りを浮かべて話すクレアたん。  
その内容にお母さんはごめんなさいと頭を下げるが、いえいえと

クレアさんは顔を上げて気にするでもなく話を続ける。

「魔王を倒せば、王国軍の方々に探してもらえることになっているんです。魔王を倒す旅、そして弟を捜し出す旅でもあるんです。本当は、弟を捜すことが目的で、魔王を倒すのは二の次……って言うたら、あれなんですけど」

クレアさんは自由都市クロテアという街で弟と二人暮らしだったという過去がある。

突如失踪してしまった弟リックを探すため、そして魔王を倒すという目的がクレアさんのストーリーであるのだ。

「あたし、急にすごい力を手に入れたんです。それこそ、モンスターを次々に倒していけるような大きな力を。そしたら何故だか私の頭の中に聞こえてきたんです、『マオウヲ、タオシテ』って。神様のお告げなのかも知れません」

そう、クレアさんはある日、強大な力を手に入れたのだ。

クレアさんは元々武道を習っていて強かったのだけれど、それでも女性である彼女に強さを求めるのには限界がある。

そんなクレアさんはある時、信じられない強さを手に入れる。大の男であろうと容赦なくぶちのめし、凶悪なモンスターであろうと薙ぎ倒す常識を逸した能力を。

「だから、あたしは絶対に弟を見つけて、魔王を倒すんです。そのためにはこの変た……タイゾーくんの力が必要になるわけです」

クレアさんはぐつと拳を握りしめて言う。そう、ゲームのキャラクターである彼女が、目的を成し遂げるにはプレイヤーである僕の手が必要不可欠となるわけだ。

「なら、きつと問題ないよ」

ミヨが満面の笑みを浮かべて喋っていた。

「お兄ちゃんはクレアさんを動かすことにおいては一流だと思うし。一度ゲームをクリアしたこともあるみたいだし、クレアさんの目的は絶対に達成出来るよ！」

ミヨの心強い一言で、談笑するクレアさん達。

その中で一人だけ、僕は心の底から笑えていなかった。顔がひきつっていたかもしれない。

血の気が引く、というのはこういう感覚なのか。もしくは背筋が凍り付くという感覚か。

クレアさんはゲームのキャラクターであり、その生き様はゲームのストーリー。

それを動かすのは僕。彼女の行き先を決めるのは、僕自身。

それらを踏まえて全てを考えたとき……………僕は彼女がやってきたという現状の側面を、思い知ることになるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9670u/>

---

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

2011年9月20日04時21分発行